

高校生の力で『細く 国立劇場の夏』



題字 井口 文章
再刊 第432号
印刷・発行
錦城高等学校新聞委員会
編集室 2023

特別版

一面：オープニングを飾った帝京高校と日本芸能部を紹介！
二面：郷土芸能部門と演劇部門を紹介！
来場者が実際に感じてほしいこととは？

第34回総文祭優秀校公演1日目開催

8月26日(土)、27日(日)に東京都の国立劇場にて第34回全国高等学校総合文化祭優秀校東京公演が行われ、日本芸能部門・郷土芸能部門・演劇部門で優秀な成績を残した学校が発表を行った。今号では一日目の各校の発表の内容や、これまでの努力について取材した。

1日目オープニング 帝京高校吹奏楽部

国立劇場特有の舞台装置を使った「舞台は廻る」によって幕が上がった第34回全国高等学校総合文化祭優秀校東京公演。開会式では、公益社団法人全国高等学校文化連盟と東京都教育委員会、文化庁からの挨拶があった。オープニング公演として披露されたのは、東京都帝京高等学校吹奏楽部による「ジャズパフォーマンス」。ジャズのスタンダードナンバーからNHKの朝ドラに使用された曲まで、16人全員で演奏するビッグバンドスタイルと数人で演奏するスタイルのバンドスタイルを使い分けながら、多彩なジャズ曲を4曲演奏した。サクソフロンテットのソロパートでは、華やかな演奏に会場から大きな拍手が起こる。観客も手拍子で参加し、会場全体が一体となった。



多彩なジャズ曲を披露した帝京高校吹奏楽部

演奏終了後、部長の山野辺花さん(3年)は「大きな舞台で演奏できることはあまりないので、気持ちよかったです。楽しかったです」と笑顔で答えてくれた。「お客さんに楽しんでもらうには自分が楽しんでしまなくてはならないと思うので、演奏中も笑顔やアイコンタクトを絶やさないように意識しました」と山野辺さん。来年以降も活動を続けていく後輩へ向けて「落ち着いていくとも通る、楽しく演奏して欲しいです」とエールを送った。

東京公演一日目プログラム		
オープニング公演	東京都帝京高校	ジャズ演奏
日本音楽	東京都狛江高校	二つの群のために
日本音楽	和歌山県橋本高校	大河
郷土芸能	愛知県松島高校	神楽太鼓組曲「祈り」
郷土芸能	岩手県北上翔南高校	鬼剣舞
演劇	東京都千早高校	アワアワに未熟
演劇	徳島県城東高校	21人いる!

日本芸能 和歌山県橋本高校 「これからも音を楽しんで頑張っていきたい」

和歌山県立橋本高等学校邦楽部が演奏したのは、牧野由多可作曲の『大河』。十七弦という楽器の落ち着いた音から始まった演奏は、激しくなったり静かになったりを繰り返すことで様々な種類の川の流れを表現している。吉田芽生さん(3年)と井本成美さん(2年)によると、大河の壮大な流れを表現するために、部員の一人が川を見に行ったり学校の近くの林の写真を撮り、部員間で共有したそうだ。舞台上立って見て感じたことを井本さんは「去年もこの舞台に立ったのですが、昨年とは出演している学校が違って、とても



川の流れる様子を音の強弱で表現



「新国立劇場に立てるようにこれからも頑張ります」

楽しかったです」と語る。この東京都優秀校公演に出場する前にがごしま総文に出場した時、会場の近くの公民館で練習した際に近所の方がピザの差し入れをしてくれるなどとても優しくしてくれたことが印象に残っているという吉田さん。吉田さんは後輩に向けて「1年生も全国大会に出ることは私たちの邦楽部の伝統で、これからも後輩の指導を頑張っていきたいです」と話す。そして井本さんは、来年は国立劇場の改修のため、会場が新国立劇場に変わることから「来年の新国立劇場の舞台にも立てるように、これからも音を楽しんで頑張っていきたいです」と語ってくれた。

日本芸能 東京都狛江高校 「一体感のある演奏をするために練習」

日本音楽部門で『二つの群の為に』を披露した、都立狛江高等学校箏曲部。狛江高校箏曲部は7月29日から行われた『2023かごしま総文』の日本音楽部門にて文化庁長官賞を受賞したことで東京公演での演奏が決まった。今回演奏した『二つの群の為に』という曲は1976年に沢井忠夫によって作曲された箏曲である。箏をはじめとする日本の伝統的な音楽には指揮がないという特徴があり、一定のリズムで演奏したり周りの演奏者との息を合わせるということが極めて難しい中、箏と十七絃という2つの楽器の音色が合わさった素晴らしい演奏を披露してくれた。前半は静寂の中で箏や十七絃の音が会場の中に響き渡っていた。その後はソロパートの静寂とユニゾンの盛り上がりの対比が演奏の美しさを際立たせていた。中盤からは箏と十七絃の盤面を叩いて音を出す奏法を用いることで演奏を盛り上げ、最後にはユニゾンによる迫力のある演奏で締めくくった。演奏後に行われた幕間インタビューでは、指揮がなくても一体感のある演奏をするために個人練習の時間を大切にしていると語っていた。個人練習をしていく中でも、特に体を大きく使った動きでリズムを感じる工夫をしたそうで、本番中にも大きくダイナミックな動きで演奏している場面が多く見ることができた。高校生による日本音楽の素晴らしい演奏を聴いて、私たち若者が果たすべき伝統文化の伝承の必要性を再認識するきっかけとなり良い経験となった。



2つの楽器が綺麗に重なる

今回のプログラムを進行するにあたって欠かせない「司会を務めた都立上水高校放送部の井上天翔さん(3年)、坂本結菜さん(2年)、原田ひよりさん(2年)、宮坂紗由美さん(2年)、牛丸楓希さん(1年)」にお話を伺った。顧問の井桁寛子先生に伺うと、毎年東京都の放送部門で活躍している高校が持ち回りで担当しているそうで、今年度は上水高校に担当が回ってきたと教えてくれた。司会進行をしてみても牛丸さんは「前日のリハーサルで厳しい練習を積んできましたが、いざ本番が始まると緊張が解けてきました」と話してくれた。原田さんは「お客さんを主体として伝える」ということを司会中に心がけたと話すが、「台本がないことを突然読まなくてはならない」という場面に出くわしても、お客様にとってそれは突然の事ではない、ということをお話された。原田さんは「お客様だけでなく、舞台の裏で一緒に作業している人たち、出演者の人も『楽しい』と感じてくれるように読みました」と教えてくれた。2日目の司会に向けて、井上さんは「幕間インタビューの時に出演者の方がメインで話してもらおうように頑張ったのですが、準備と工夫が足りなかったように感じます。2日目はここを重点的に直している人なにとって最高の舞台になれるように尽力していきたいです」と意気込んだ。

裏方生徒特集！井上

今回のプログラムを進行するにあたって欠かせない「司会を務めた都立上水高校放送部の井上天翔さん(3年)、坂本結菜さん(2年)、原田ひよりさん(2年)、宮坂紗由美さん(2年)、牛丸楓希さん(1年)」にお話を伺った。顧問の井桁寛子先生に伺うと、毎年東京都の放送部門で活躍している高校が持ち回りで担当しているそうで、今年度は上水高校に担当が回ってきたと教えてくれた。司会進行をしてみても牛丸さんは「前日のリハーサルで厳しい練習を積んできましたが、いざ本番が始まると緊張が解けてきました」と話してくれた。原田さんは「お客さんを主体として伝える」ということを司会中に心がけたと話すが、「台本がないことを突然読まなくてはならない」という場面に出くわしても、お客様にとってそれは突然の事ではない、ということをお話された。原田さんは「お客様だけでなく、舞台の裏で一緒に作業している人たち、出演者の人も『楽しい』と感じてくれるように読みました」と教えてくれた。2日目の司会に向けて、井上さんは「幕間インタビューの時に出演者の方がメインで話してもらおうように頑張ったのですが、準備と工夫が足りなかったように感じます。2日目はここを重点的に直している人なにとって最高の舞台になれるように尽力していきたいです」と意気込んだ。



舞台上で各校の舞台の紹介を行った都立上水高校の放送部員

裏方生徒特集！井2

公演と同時に、国立劇場の二階では東京都内の高校が集まった茶道部員による茶道の呈茶が行われていた。午前は季節の果実であるレモンのお菓子が茶菓として配られ、午後からは団子風の干菓子もふるまわれた。編集委員は午後の茶会に参加したが、茶菓子が甘くなった口には、程よい温度で配られた抹茶がマツチした。接待係を務めた都立千歳丘高校の山田結月さん(2年)と佐藤七香さん(1年)に話を聞いた。お茶会は18時30分までの三回ほどで、整理券を配ったが、お茶の癒しを求めてやってきたお客様は毎回500人ほどと大盛況だったと話してくれた。山田さんと佐藤さんは「案内をしているとき、いつものように学校でやるのとは全く違ったので緊張しました」と話してくれた。お茶を点てるのを担当したという私立杉並学院高等学校の張夏寧さん(2年)は、一般の人に茶を点てるのにあたって「いつもより丁寧で、心を配って点てました」と笑顔で振り返る。都立千歳丘の山田さんもお客様の席を間違えないように「お茶を点てるのを担当したという経験が役に立ちました」と話してくれた。これからの部活動の活動などについて張さんは、「貴重な場所です敵な経験をさせていただきました。今回の機会を糧にこれからも頑張りたいです」と話してくれた。今回は編集委員が活動していた楽屋にも呈茶の差し入れをいただきました。この場を借りて改めておいしいお茶に御礼申し上げます。



楽屋の私たちが星茶をいただきました！

郷土芸能 愛知県松陰高校

「未来への祈りを込めています」



未来への願いを込めて、激しい演奏を披露する

愛知県立松陰高校和太鼓部は神楽太鼓組曲『祈り』を披露した。松陰高校は出演校から作品紹介を行うという他にない方法で登場し「郷土芸能の祈りを受け継ぎ、未来への願いを込めています」と、作品紹介してくれた。舞台は巫女が鈴を鳴らす場から始まる。場面が進むごとに太鼓の音が大きくなり、一致したリズムと動きで観客を魅了した。さら

に演技の途中で、太鼓をたたいていた生徒たちがバチを投げ上げ見事にキャッチすると会場から大きな拍手が起こった。演技も後半に差し掛かった頃、巫女役の生徒が歌を歌い出し、ほかの生徒も舞台上に登場し、歌がより力強いものとなった。さらに屋太鼓や大桶太鼓などが演奏をより一層盛り上げた。最後に始まりと同じように巫女が鈴を鳴らすと、会場から大きな拍手が沸き上がった。

演技終了後、松陰高校和太鼓部部長の佐藤大将さん(3年)に話を聞いた。佐藤さんは今回国立劇場という舞台に立つとても嬉しかったという『失敗したら』というより『悔いが残ったら』という緊張の方が強かったです。楽しんで演技できました」と話してくれた。また、高いレベルまで演技を完成させるためにコミュニケーションを大切にしたいと「自分の中にあるこだわりをぶつけたい、一人一人の意見を大切にしたい」と話してくれた。また演技中に使用した歌は学校近くの神社のお祭りなどで使用されているものだと、地元の人から教えてくれたという。

後輩へ「ここに立つことは憧れだったと思うけど、これからもその憧れを忘れずに、もし同じ演技をするとしても真似をせず、胸を張れるものを作り上げてほしいです」とエールを送った。



「楽しんで演技できました」

郷土芸能 岩手北上翔南高校

「納得のいく演技ができました」



ヘンパイを力強く踊る姿

岩手県立北上翔南高校鬼剣舞部は、おはやし太鼓1人、手平鉦2人、笛7人、踊22人、計32人で「鬼剣舞」を披露した。「鬼剣舞」は、岩手県北上地方の農民に伝承する民俗芸能だ。約1300年前に始まった念仏踊りで、刀を持ち恐ろしい鬼の面をつけて踊ることから「鬼剣舞」と言われている。

踊りの中に「ヘンパイ」という足踏みがあり、大地の悪霊を退散させ、天下泰平、五穀豊穡の祈りが込められている。ほかにも扇子や刀など道具を使った激しい動きや息の合った掛け声で会場を沸かせた。また、様々な種類の踊りがあり、最後まで観客を飽きさせることなく楽しませた。「鬼剣舞」は18もの項目で構成されており、中でも「八人加護」が工夫した演技だと鬼剣舞部部長の加藤楓花さん(3年)は語った。踊り手が刀先をもって演技する難しいものだが、これは人を切るためではなく、農民の

願いを刀に込めるために特別な持ち方だそうだ。「ダイナミックな動きである分、最も大変で難しい演技で練習も大変でした」と振り返ってくれた。練習を重ねたその力強い演技に、会場の観客は圧倒

されている様子だった。

加藤さんは、今日の演技について「本番直前に体調不良や怪我による演技の辞退など様々なハプニングが起き不安だったが、部員全員で協力し合い、納得のいく演技ができてよかったです」と笑顔で話してくれた。今後の部の抱負として、「今年全国大会に出場すると来年は出場することができないのですが、もう一度基礎からやり直し、技術をより磨き再来年も全国大会に出場できるように後輩たちを指導していきたいです」と意気込んだ。



「再来年へ向けて指導していきたいです」

演劇 徳島県城東高校

「みんなで話し合いながら作り上げてきました」



緊迫感あふれる演出に引き込まれた

徳島県立城東高校が披露したのは、演劇「21人いる！」だ。登場人物は地下室を練習場に活動する演劇部員21人。その傍ら、地上では爆撃音や警報が頻りに響き、男子部員が「ボランティア」と呼ばれる活動に召集されたり、女子部員が地上での爆発に巻き込まれたり集まる部員が徐々に減っていく。

緊迫感溢れる演技と、照明を効果的に使った舞台に、観客は

息をのんで物語の行方を見守った。部長であった男子部員が「ボランティア」から帰ってくる場面では、変わり果てた男子部員の姿に涙ぐむ観客の姿も見られた。

舞台終了後、現部長の林はなさん(2年)に話を聞いた。舞台を終えた感想を聞くと「まだ終わったという実感はないですが、長い時間練習してきただけの成果は出せたと思います」と笑顔を見せた。林さんが「社会的なメッセージが強い作品」だと話すこの演劇は、脚本を書いた顧問の吉田晃弘先生や、演出を担当した前部長の浅野碧巴さん(3年)を中心に、物語の背景や演出の意図を部内で共有し、話し合いながら劇を作り上げていくことを一つの重点として置いて制作を進めたという。

城東高校演劇部は今年、12人の1年生と1人の3年生を迎え、総数34人で今公演に臨んだ。「この人数で一つの劇を作るのは大変でした」と林さんは振り返り、また「人数が多いからこそこの1つのまとまった空気・作品・世界観を作り上げられるように、自分たちならではの強みを持ったまま今後も演劇に取り組んでいきたいです」と今後の抱負を語ってくれた。



「練習の成果を出せました」

演劇 東京都千早高校

「一年間ずっとこの演劇と向き合ってきました」



実際のエピソードに基づいて作られている

演劇部門では東京都立千早高等学校演劇部が「フワフワに未熟」を披露した。この演劇は当時1年生だった演者の「高校一年生である今でしかできないこと」をテーマに実際の学校でのエピソードやあるあるを面白おかしく表現した短編集のような形で、中でも注目を集めたのは一人の女生徒がよく失くし物をする、というエピソードだ。

「私よく失くし物をするんですよ」という快活な出だしから実際に

今まで失くした物のエピソードを話し、最後には手に持っていたはずの水筒が必ずなくなっている。という流れだ。水筒がなくなったことに気づき観客に「ほら！」と話す姿に会場全体から笑い声がこぼれた。このエピソードは三回あり、1回目は眼鏡をなくし、2回目はスマートフォンを、そして三回目ではなくした水筒を友達に返してもらおうという流れに短編集ながらもストーリー性も兼ね備えているところに私たちの目はひきつけられた。

舞台直後のインタビューで櫻井ひなたさん(2年)は「この作品は1年生だけで作り上げたもので先輩方の力を借りずに大成できるのか、という不安はずっとありました」と振り返り、今回の舞台については「1年間この演劇とずっと向き合ってきたので国立劇場という舞台に立てた達成感ともう終わってしまったという悲しさで複雑な心境です」と話した。

また、難しかった点については「この作品は自分たちの日常の中から特に楽しかったこと、面白かったことを劇にそのまま表現したものなので動きの息を合わせることはそこまで難しくはなかったのですが、いつもより楽しそうに演技するのは変な感じがして、少し難しかったです」と笑顔で語った。後輩へ「つらいことも楽しいこともたくさんあると思いますが、押しつぶされないうで頑張してほしい」とメッセージを送った。



「達成感と悲しさで複雑な心境です」

1日目午後の演劇部門が終わった直後、会場でインタビューした。公演の興奮が冷めやらぬ中、取材に応じてくれた高校生は、自身が演劇部で今夏のかしま総文に出場しており、今後の作品作りの参考にするために公演を観に来たのだそう。

千早高校の『フワフワに未熟』は、たわいもない日常を描いただけの作品なのにも関わらずリアリティーにあふれていて、キレのよい作品に仕上がっていた点にすごさを感じたという。城東高校の『21人いる!』は、自分たちから得た学びを演劇の中に反映させており、演劇の新たな作り方に気づくことができたという。実際に2校の演劇を通して学んだことを生かして、より良い演劇を作っていくと力を入れて公演を振り返ってくれた。

来場者に向けてきた!



町田工科高校の皆さん 出演係を務めた

今回の東京公演は、司会や誘導、舞台補助など、裏方を東京の高校生たちが支えている。この形はコロナ禍の年ではできなかったもので、各校の生徒が一生懸命務めていた。出演係の係生として裏方仕事の一端を担った都立町田工科高校の山下咲さん(1年)、鈴木海斗さん(1年)は、

年、椎木梨奈さん(1年)、菅野瑞紀さん(1年)、橋本楓さん(1年)の5人に話を聞いた。「人間と社会」という授業での活動選択で、この総文祭優秀校公演の出演係を選んだという山下さんたち。出演校の生徒の案内が主であるという出演係の仕事は、「裏方で働く人の仕事ぶりが見られたり、普段では入れないところに入れたりするので面白いです」と話してくれた。また今回大人たちの中で裏方の仕事を経験して、椎木さんは「計画的な移動が求められたので、そういうことを今後の学校生活の中で生かしていきたいです」と笑顔を見せた。何かこのような活動に参加する機会があったら、ぜひ皆さんもチャレンジしてみたいか。普段ではできない体験ができるかもしれない。

裏方生徒特集! 井